

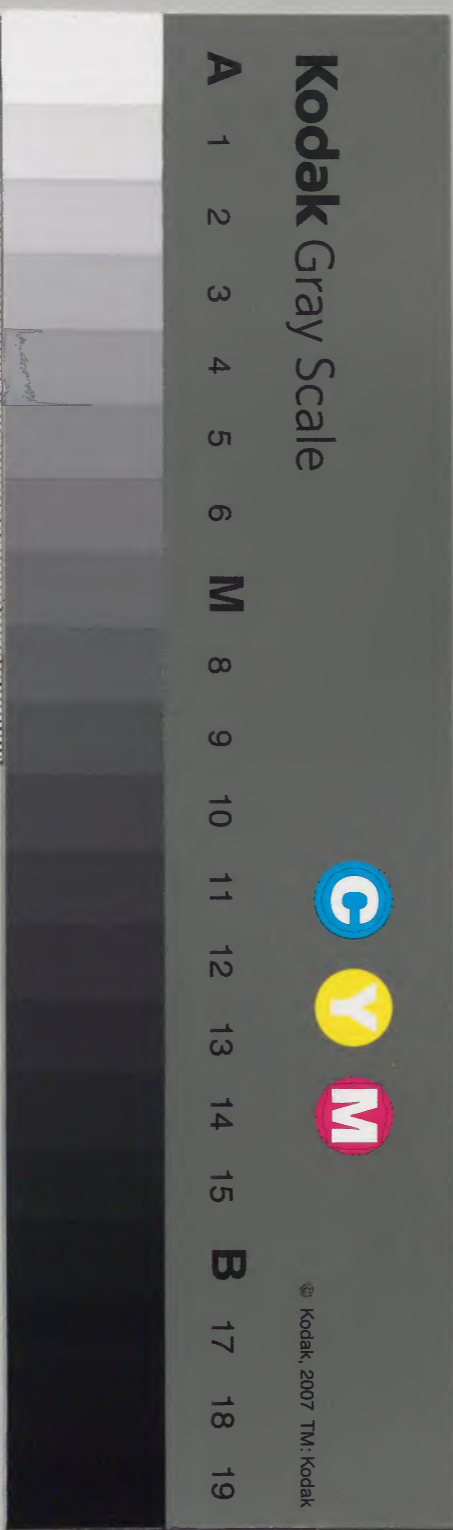
倭州集 中編 古之部

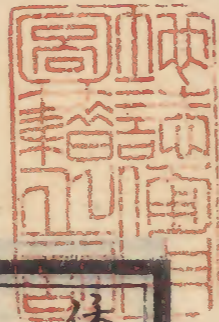
八

			和書門類
	三六七二三		
一	二	三	
函	架	册	
六	四		
册			

庫	文	閣	内
二六三函	三六七二三		和書類
二架	六四册		

内閣文庫	
番號	和 36723
冊數	64 (42)
函號	263 7





倭訓梨中編卷之八

洞津 谷川士清纂

古の部

卧亞 譯也蛮國乃名也やまのり 治天者なり

碁石也白黒のり 紀伊の白黒那那那と稱せり

白は式部日記

木の白はあけり 此は白のりなり 木のり

又山家集に伊勢のりなり 此は白のりなり 此は白のり

又六つも雜らひひいてまがたり 此は白のりなり

又いそぐ答志郡まがりの内ふ鳥橋のりなり 此は白のりなり

又鷲嶋のりなり 此は白のりなり 又豊後佐賀の國ふまがりのり

此は白のりなり 天然の碁石のり 長門の碁石のり 全浙兵制

日本風土記ふ圍碁子非造成者乃本國沿海之傍而有生成石子儼

如做成精緻名曰天威子出于艮久山沿海之處白子出于大隅山海傍皆大隅州所屬之地と云々太平廣記日本國王子來朝本國之東有集真嶋々上有凝霞臺々上有手譚池々上有玉基子不由制度黑白分明と云々今古昔皆自然の石子と用わると云々今名石と云々白ハ海蛤と云々磨琢して造成り艮久山ハ西海の夜玖修集真嶋ハ伊豆の神集修と云々し○今唐山舶来の基子ハ練成りたる物也雲林石譜ハ自然の棋子れ事と云々○南都正倉院石塔の基子ハ珊瑚瑠璃瑪瑙と用わると云々此等の畫りり○畫りると云々然れハ白ハつらと云々大徳礼と云々

こつていさき 小板敷と云々禁中殿上と云々職原抄侍醫參小板敷と云々禁秘抄小板敷西有棹間小庭時簡膳棚灯樓と云々と云々千載集ハ二系院の法耐小板敷と云々五文字と云々の上と云々て旅のつらと云々

△ 狗あめくいさるふゆのん之田川 後 海岸のつらと云々

俗と云々なつと云々たつと云々ハ功字也

神代紀ハ産字と云々日本紀の云々と云々

めつらハ略と云々也

公儀と云々親房ののあふ義時泰時等随分存公儀と云々應仁紀ハ公方儀と云々

建武年中行事ハ鈎丸と云々法籙ハ付の鈎也

内裡式清和實録等ハ勾當其事と云々當時ハ女

官及座頭と云々語ハ閑勾當と云々○通雅ハ唐以來有勾

當之語韓文ハ勾當州學と云々今勾當專當と云々言ハ小

右大臣拜賀の時平勾當時盛藤勾當

頼隆と云々○勾當内侍ハ長橋の弓と云々一の内侍也新田義

貞と云々勾當の文字と云々ハ初と云々

ハ初と云々

公案ハ公事の案文也口案ハ張九齡ウ故事

天寶遺事

紺搥也職人守合

と撥たてて染るも也庭訓

ききりしや西京乃通也カ

し長ぬ

このつらふ深かひ色

年貢も

ぬ布か

口海

候人

洪水

野槌

野槌

ゆゑに世に

公用私用の字

東鑑

○肉々行

薨御

納言

東

俗

高名

子産

中

一

形

且

こがき 人と作るべし以て跌下のも也自己よこけきつ
俗修也

こがく 小角とありしぎのた也よこ公卿地よ小角と
多く盃とをくまをなまりの盃也よこつり

こがー 雑事通考一江浙民家來年及粳米焦熟磨之為
粉名曰芳雪霜とるえらる也よこつり○豊大岡北野大茶湯の

時一僧りりて漲らる白湯よこつりかしてちも大岡其淡薄乃
一盃と感せし今祇園林の茶店よ用るは是より起るよや香

前と呼ぶ
こがくろ 太秦牛祭文よつろえらるる處名がろくし候勢れ

こがくれ 本陰よかくろや
こがたね 小刀也武備よ小刀と又小刀と挿んて雜用し候

ことり

こがくろのまごもろをぬ小刀のせよたをそや思ひ候ぬれ
日本紀よ金饒刀とあり四時祭式よ金銀装

横刀とるくく祝詞或は金刀といふもの也東山府の湯金
化銀大臣以上用るとる大徳れよこがく刀折金つるりや

かきりあらる沢の禁制也とるえらるりされは古法の器よ金と
いふ多く減金也といふことハ金化の法も知し歐陽文忠公全

集日本宝刀乃初も黄白間雜鍮與銅と化まるもえつり近
き世よこつりハ公卿大夫ハよりれるよこ夫分上乃腰刀か

と金無垢と用るよこハかまり驕奢の極とるものよこ
こがくれよりく 倭名抄よ金屑とあり又銀屑の

△こき 国忌のよみ也
こき 神文雜例集よ御蓋長とるえ神宮よ御蓋の倉お

あり世徳翁抄治よ食物ハよこ御蓋かよこまわ

スルより清岳の字新書にも○茶盤より字上の長形の似る
也こはち麗乃産也とのり

こきり 御給とちり院文の清給かとのり

こきり 鼓りとちり中山録小提琴即三弦著引弓子

とちりスルも是也又篋篋の取也とのり一説よそと鼓と蛇
とちりとのり中山録一國中蛇九月出傷人立斃とスル

こきりこ 職人字合ふりとのりこのきりことスルもの筑子

とのり小截解の取やかと及こ也とのりこれ棒乃如

こきでん 弘徽殿也抄記スルもの

こきやく 沽却字善相公意見よりスルもの○こけんハ沽券也

こきまろ 万葉集小抄ふこきまろの事也かき入つ也

こきたれて ぬみりハかきとれて一甲一稻ふりハつて成こ

くふ考てとのり後撰小素こたるとしてハ素の多成と成考

もとのりハ

こきまぜて 柳振とこきまぜてかきりハ撥文ての取也

やとのり

こきまろ 女の下裳たハ紅かきと成ひの本つてまろ

とハは雲のときと成りとのり万葉集

むらきたれつとこひもぬみよかも恋うりやせんあや

こきりちりひ 伊勢物語小腹ハ深味も出来しと云也

△こき こきとれてこきまぜてかきりハ雅語也倭名新

にも霍乱とありとのりちりちりちりちりちりちりちり

ア又縮とちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

こきり 四十五と成りちりちりちりちりちりちりちり

とろくもかきとろく

こくね

木陰とつとつろの音きと也

こくろ

小串の矢射術とつろの串的也

こくそ

木屑の矢射下し類聚雜要に木屎布る也穀耕録

一稍當とつろの船のこくそハ船茹也船船とつろも同

一蠶沙とつろ

こくハ

日中紀の行ふつろあり私記ハ木鋏也とつろ今ハ

鑄也

○こくみ

一説ハ白人と云ひひびくハ古久美の美と麗

改めて新羅人高句麗の美とつろ犯巴母罪犯己子罪等のみ我

朝ハハツえぬと云ふより佳多約所人等兼人びよつりして

冠とつろとつろ

こくい

刻印の象也とつろ俗とつろいといつろ無寛録の注

一鑿記拙言刻標也とつろあり

こくつ

高句麗の音也○衣とつろ色とつろハ小粟也

こくろ

国司ハ孝徳天皇のけり始々国道の事とつろハ

ろとつろ年治りつろ其国政と執とつろ○三国司ハ土佐の一條

伊勢乃ハ畠山孫乃姉小路とつろハ数代とつろ其国ハ裔孫の

ゆり也

こくぶ

氏姓村里とつろ国分とつろ昔法ハ国分寺国分

尼寺と建て東本寺と惣国分寺と天平中の事也又ハ羽院乃

天永年中ハ六十餘州ハ天永ちと定められとつろ○信濃小

縣郡乃ハちと今ハ旧堂とつろ二寺毎正月八日とつろ十四日まで

寂勝経轉法とつろ也

こくが

国衙とつろハ司の政と行ふ也今ハ尾張中治郡ハ

国衙在りつろ司館乃趾と国衙畠とつろ朝野群我ハ依庄園

訖送国衙牒とつろあり

こくが

国学ハ倭学也神学乃り欲学乃り虎関の国学

者藝術也といふは有職者流と指ていふや道德不関らぬ
如くおもふはいふやうし

ぐくもん 梟也獄門不敷るもの故ふ其處とりていふ也

こくそつ 中納言友保李仲太宰帥とある色はあしとく黒帥

と呼びしは氏に髭黒の大將なり

どくろく 佛の日光と後光といふより物の影に映るるといふこ

どくろく 俗ふ人と罵詈雑言の言句絶の義ありといふごと

よはもといふ六不堪言句の義ありし言語乃ちいふや如く言後

道断なりと天台大師乃妙法と讚美せし也

こくろり 黒餅の衣幕の紋ありし中世の武士矢口祭に黒

餅とりと家紋とせし也といふ

こくろく 王禹偁表し早年多病眼有黒花と見えたり俗に

黒いお花といふ

くくせんや 国姓爺といふり李朝の功臣郑芝龍日本平戸鴻

一住して鄭成功と生り芝龍清の大祖に降る成功永曆帝と
立て明の恢復と謀るして帝朱氏と賜りししをわが時人の採
りり康熙五年に大宛に卒す其子錦舎其子奏舎といふり康熙廿
五年に侍とありて北京に幽せし後貞享九年に歸り隠元
禪師の持来りし鄭成功の書蹟もまゝ観つし

ごくのねび 拾遺集に西玉帝といふ也

△ごけ 碁筭也後撰集抄紙にこのけといふる碁盤

是也○南都正倉院所藏の碁筭ハ碁盤の足ハ抽匣といふ

碁の形石と入り足もあざといふて柶子形あり○碁子に

一目二目といふ六文選注に柶棋局線道也卦線之間方目也といふ

ごけ 後家乃字朝野群載に推中納言某朝臣後家といふ

儀式帳安東郡専當沙汰といふも今も寡婦と稱せり後

室といふ

こげふ 焦とよりのこげと自他の異也○焦飯とこげや
とのり

こげい 御禊と音より也源氏より名賀茂は新院卜定
あつて後赤松は信長は信長とみぎざあとのり大嘗会より
のりより河内は行幸ありて行々其儀式れひるしとれは後
世六略よりとく晝御座ふ出御ありて行々も也皇帝三后
東宮齋主かとお禊よりひたのんよ後よりとりのり

こげん 固閑とよりの赤松の閑とかさひるはとのり御
即位ありてある事也○御監とよりの西宮記ふ左右馬寮之御監
事上卿奉勅召御寮官人よりとく御厩馬監騎射之義也とのり

こげろげ 麴の終るふ時よりとりのり頭のも也とのり
こげろが 漏猿の衣よりや群猿の中よりとりのりござんて搦りふ
ありとるべし

こげかハ 苔縄の城ハ播州より赤松築て義と奉し事也

こけいらん 虎溪蘭の美徳の虎溪より出る事也紫

こけのあれ如くはまゝ招きとらり

こけろぶき 屋よりハ棟葺の事也

こけろあゝ 俗流也とけハ苔よりや新帖ふ

△ごぞ 長崎より小兒の事とひ仙臺より人の妻とよ

こごち 心路の事と下し俗心よりとよ心みちの終る事や

○ごちりてとよ相承承の事と老孝の説也

ごぞろ 万葉集より疑字とよりのりハ寒疑の事也靈異記よ

煮鯉寒疑とよる今もたふと鯉よりと射あといめり

ごぞめ 世人小兒と怖るんわわわといハ醜女の訛也と倭名抄

よつア著書集ふ鬼ごぞめとよる今も信あめといつは信

訛ぬア赤目とよ得たより 睚と反とよるハかぬぬし○碎

米とよつア○笑鬻花といふハ碎米と似たり也○俗は屈め

とこめつともつり
氏姓の牛糞とあり又よくそともつり太平記もやろ
也也

こがや 懲辱のあか下し俗也
こがろけ 土器のあきとよ小かりけの急也たろ
けとよ

こがろく 万葉集もつるもそこぞくも同
も云く曾許波久も連きつり此所其所とよ言也仁徳紀の
よそとよちのひてまこつりよれひてとつり同

こがろく 凍又返とありろくも及也
こがろけ 密聚のこつり疑成乃あか下
こがろき 萬葉集疑敷山とろく又興敷と名興登魂の例也
石根とろくもろくも同

こがろく 〇こがろきとよ六面同つり
こがろく 〇こがろきとよ六面同つり

こがろく

こがろむ 神代紀ふ試とあり心観のあまら

こがろむ 心得のあまら

こがろむ 心際の家と拾き

こがろむ 文選と奥咄とあり

こがろむ 遊仙窟の關情とあり

こがろむ 後拾き集とあり心のえゆる也

こがろむ 心あてがひのとあり

こがろむ 万葉集も情具とあり心く

こがろむ 爰とあり也

こがろむ 浮氏とあり日本紀ふ心府とあり心肝のあか下し

こがろむ 心也むのわろ

こがろむ 心と寄す也

こがろむ 延喜式と凝菜とあり凝と俗とあり

こがろむ

こがろむ

こがろむ

こころかまへ 活氏もる心は度のもこ也こつ

こころこころ 活氏もる心は度のもこ也こつ

こころゆうー 心の行なぬし夫木集

こころおれ心ゆしおもおらこひし乃我もかかた

こころおし 伊勢物語もる心重きおれこつ人をもつ

こころゆふ 活氏もる心重きおれこつ

こころおら 心券也徒然草もる

こころのこは 法苑珠林ふ心馬情猿こえん自鏡録一意馬情猿

こころのこは とえん息心銘小識馬心猿とえん

こころのこは ひんれおひききならも入ぬしんこはつたつねゆもな

こころのこは かここのおのふおれこつたこつらのおもみときけ

こころのこは 陶淵明もる中のおを放ちたるを事まらふ也

こころのこは 心のや也まらふとこ

こころのこは んれ券也胸霧とこ

こころのちり 心の塵也みらうかき也

こころのほゆ んの落也れとせむこ

こころのあみ 心の辰也さかきも

こころのしり 心はは連也結このこ

こころのたひ 石田もる倭語の口訣と公家もる幽齋翁

こころのたひ 古も今もかりぬ世中もあつたのこつたのこつたの言の思

こころのたひ 古今集の序人の心と種とて方のおれとてあつた

こころのたひ 幽齋翁八圓智院公國卿もる古今集の正統とゆれ

こころのたひ 菅家もる集もる心之熾くもる

こころのたひ 伊勢物語の心之軽也

こころのたひ 伊勢物語の心之苦也俗もる苦もる

こころのたひ 心之占也こつたの海也こつたの心

こころのたひ 心之占也こつたの海也こつたの心

ト已審くまゆ

心の秋也あかき
 心の仇也端緒とらへ也
 心乃闇也くらき
 心月とらへ救也
 心水とらへ救也
 心の流也せき
 心乃松也みきわの
 心乃杉也まか
 心の奥也ほき
 心海也抱ち
 万葉集も伊勢物語も
 心乃地也

心の秋也あかき
 心の仇也端緒とらへ也
 心乃闇也くらき
 心月とらへ救也
 心水とらへ救也
 心の流也せき
 心乃松也みきわの
 心乃杉也まか
 心の奥也ほき
 心海也抱ち
 万葉集も伊勢物語も
 心乃地也

つらのつれさそ

詩鶴鳴九臯より人のさ也基俊

つらのつれさそ 九のさりよちあうりたつるそとありあまハセきこゆき

つらのつれさそ 心のあふとくしあ物終りり相陳かす他也と

つらのつれさそ 新撰字鏡より心とせり

つらのつれさそ 心の鏡也花む集より心とせり

つらのつれさそ 心乃慰ありとせり

つらのつれさそ 千載集れ所より心は泉也

つらのつれさそ 心の湊也花む集より硯とせり

つらのつれさそ 心乃風也とせり

つらのつれさそ 新撰字鏡より松又仲とせり

つらのつれさそ 九節の菖蒲根ハ仙衣の貴物也

△ごさ 松葉紙ハ清江とよみたりはあふとせり貴人の

あうせりあふとせり今ハ紙の好とせり○社ごさ臥

席也○湯船ハ樓船也漢より大座船とせり○俗よご

これとよハあまき也

ごさい 六月十六七日と伊勢の清祭礼とすよ六甲土用半

ごさい ちりちりの風とせりはるそとせり

ごさい 日本紀倭名抄ハ醴とよみり濃酒の系也今俗ハ

ごさい ざけとよハ漢書ハのほハ甘酒也とせり

ごさい 小賢きの略也點智とよみ俗ハつらごさいとよ

ごさい 山谷集ハ小點大癡螳捕蟬とせり

ごさい 混雜の音ハつらとせり

ごさい 新撰字鏡ハ移とよみり又接とよみり

ごさい 御齋會とよみり太極殿にて最勝王經と講

ごさい 也桓武天皇より好

ごさい 平家物語ハ多き向也とせりはなれのみ

ごさい 一トそあまき也

ごさい 日本紀ハ醴泉とよみり享保十二年正月

こーん 俗にこーんなるをいふ清神の音なり。伊勢に於てハ
 あゑと抄ていひ豊前にてハ宇佐とていひていつる。○五辛の義ハ
 又五葷といひ新羅神社に忌上世論あり中古より此法に依りて
 受領にも殊病なりてたやとて合ふへかりし法例なるも
 令義解に大蒜葱蒜葱蘭葱興渠蘘香也とるも又親氏
 の説に据まり一説小西土の俗に元旦立春葱蒜韭蒿芥と五辛
 こそ新を迎ふの儀に取る杜詩に春日春盤細生菜といふ也といふ
 也公界にハとぞ。○本所公堂上法家一同乃結也。○清所ハ天子
 の結也山陽公載記に矢下如雨及清所とる也
 こトは 姓に兒湯とあり備前の子洲より公兒孫に徳公元弘
 勤王の人也
 こトみ 昏鐘鳴の音ありといふ入徳といふ
 こトや 小四方とあり俗にハハオ也又供清の物と裁て抄

通して小きき臺也地下に用るる向詰ありぬめく細長し

こーざー 紫式ア日記小みの腰指の義卷指也といふ

こーおび 日本紀に腰帶とるるなり正字通に味與味通
 女人腰帶也といふ。○衣冠のけしきに丸いけしきとありて

おトガク 倭名抄に楸ハ俗にハ巾子形とるるなり闌も同
 一門の中央の杖也といふ

こーか 來りかては義也といふかとも同
 こぢり 倭名抄に兄公と訓せり小舅の義也

こーりや 勝といふ侍女也中櫛箕箒と譯せりも通せり
 りく小兒と小姓といひて侍童の稱

あかり 石林燕語に從駕謂之扈從といふ童堅の稱とあり
 こつら 司馬相如云扈尾也從後也といふ。○胡椒ハ近來後村守
 胡椒丸吞といふ崑崙香末といふや。禁裡仙洞ハ胡椒の

於て忌とつら○故障ハ北の折ふるの

こーやく口釋の音かりとつら小師役の急措ぬし今點

智とつら五節ノ師小師とつら類聚雜要とるえら

こーとみ禁祕抄小殿上六間有小部主上覽殿上所也とるえ

こーづみ腰文の紙と受ふ封し大流孔ふるえらとつら

こーりぬ封し内書也とつら封しめとるえらハニツリてと

こーりぬ腰當の袋矢と佩とつら

こーりぬ腰推乃使使唆のとつら

こーつぎ腰次とつら布の袴也上結りの付用下袴近代ハ

平箱也下結の付指申の下用とつら

こーら景行紀ノ技字とつら

こーら和名抄ノ體とつら腰骨也とほと

こーまた大双紙ふる由腰纏の紙女の服とつら女房飾抄

四月初日よりゆきもこーまたとるえ内々行幸ふ小社地社

アかこもも同給給也とつら○信濃高井郡ふ腰巻村り

こら倭名抄ふ女公と訓やり大学衍義補自唐以來

稱為小姑とるえとつら尔推小夫之姊為女公夫之女弟為女妹とる

こら木采垣の紙野とつらと大垣とつら

つらとつら○神云あらの朝廷遥拜也又作つらとつら

列と整つとつらとつら

こーのとつらまとつらけふ婚取とつらしとつらととつらととつらと

縫合せとつらとつらとつらとつらとつら

こーのとつら腰物の紙刀紙刀の腰刀のとつらとつらとつらとつら

こーのとつら和名抄ふ紙茶とつられみらのら紙中とつら

こーのとつらみら乃紙後とつらのみら紙中とつら

こーのとつら陶淵明全書ふ我豈能為五斗米折腰向鄉里小

兒とるえ老学庵筆記ふ以小人為小兒耳とるえとつら

倭名抄ふ金漆樹とより本草ふ金州者為佳

世称金漆とるなり

新撰字鏡ふ儀とより腰袋の也

平治の我ふ大旗腰小旗とるなり近代の腰差

指物かのれやとり

五常樂とり倭名抄ふ五聖樂と儀も

文徳実録ふ帝聞光定在山資用絶之別賜

乞食袋濟山中之急とるなり耳底記と字同ハ乞食袋の也

倭名抄ふ食調曲りを採樂か入とり作係抄大食調とるなり

食調と枝調子とり唐志と歌指調の也

法書所とるなり法書所預かりとり朝野群

我小同所覆勘同所開闔とる也倭名抄と蘭林房かり

平治相治ふ佐の也とり

こかけの

日本武尊の腰掛石ハ近江醒井の水中とり

神功皇后の腰掛石ハ筑前穗浪郡の大野とり方四尺許とり

大塔文の腰けけ石ハ吉野十津川ノ野兵衛宅趾の也

腰掛松也鎌倉杜戸村とりハ頼朝の也

ひハ伝入りハ義経の腰けけ松也とり枝四方ハ

高僧傳

五色水以都梁香為青色水時金

香為赤色水五隆香為白色水附子香為黄色水安息香為黑色

水以灌佛頂とる也

高僧傳ハハ木等とり也とり

統一とるなり

志名伊勢相治小吉来とり也

紙路ハ三越の地とりハ或ハ塞とり

老陰の地とりハ或ハ塞とり

浦紙後也

△むす 茶碗をくはつて極素とちり讃岐の陶村のむか
石ありを焼くむくわ画焼青也つて美法赤坂山も
りつてむく変名也もりきむれ焼物ゆき昂と倒淡せり
つて

つて 倭名抄の梢とあり木末の也也○こまのまこ
おまの秋の抄春秋の漢名よりつて河也
こまゆ 小研乃名倭名抄の碾とありゆとありに通せり
或ハ錯とあり又櫟とあり

こまむ 碁のよみ河也尖字とあり
こまり 倭名抄の錯子と訓せり鑢の別名又摩也と注せり新
撰字鏡の借木とあり磨木之具也と注せり借ハ錯の誤字とや
こまね 漢語抄の松とあり唐韻の鋏の属とあり木鋏の
名とや

○こせ

瞽女の轉訛とありや或説し御前也常盤御前
静湯前の稱と比せり瞽者とありといひ瞽女と清和と
ハ美号とありと傳む也とあり○尼法茶とありとあり
盛衰記とあり

こせち 五節の名案ハ左修とあり大嘗会とあり
こせけハ頭宗紀とあり本朝月令の況心得とありその吉野
のころとあり古事雄略記小括とありとあり其のハハ
名と節略として短弁とありとあり○神とあり五節舞あり

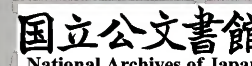
事大神とあり○建武年中行事とありひめつら五とあり
舞とあり○建武年中行事とありひめつら五とあり
てとありつとあり本朝月令のこせ也
こせき 長明が海道記ハ小関とありとあり大徳のこせと

こせつ 五節供也元日重三重五七外重陽とありハ朔に

のそのり、委、一、朔望と賀もろ、西土も回、廿八日大権現岡
 崎の清居城の対清家臣に於ち宗多切りし故廿八日の朔乃場、
 系、端、其日清機嫌と伺、う、風俗の礼とありしとや
 こせんド、野曲、曰きうも、やうこせんド此紙とるんや
 小宣旨の紙也といふ、一説濃凍紙也といふ、
 こせぬも、乃、集、有、巨、勢、濃、香、毛、と、有、興、宿、鴨、と、も
 へんてこせもこも、「言の物せう也」
 こせちところ、雲、因、抄、小、五、節、所、常、寧、殿、の、所、り、と、も
 △こぞ、去年といふ昨日ときをいふやめ、又去歳の将音次
 一〇こぞと略しともいふ、母、之、集、と、る、ん、や、り、〇こぞとるんや
 こぞ、お、ゆ、の、ち、や、ち、ぬ、種、手、は、て、却、月、三、月、の、つ、い、と、も
 こぞ、清、雨、の、音、と、び、や、ん、の、唱、う、う、や、今、こ、も、つ、こ、ぞ、
 を、い、ふ、其、音、と、い、う、一、條、衣、れ、餘、胤、土、佐、小、住、り、り、長、宗、我、部

元親の攻落されし付

一條で他りまゝ紙衣破とらまは御祈りきもせぬ
 こぞめ、濃、漆、の、衣、也、多、く、紅、の、こ、ぞ、め、と、ら、ま、り、〇、菘、と、こ、ぞ、め
 草、と、い、つ、る、お、ま、あ、う、ん、ん、ん、
 こぞろ、う、治、持、き、ふ、蛇、こ、ぞ、ろ、を、り、う、う、て、こ、も、暗、り、の、ま、也
 俗、と、ら、り、と、い、ふ、こ、ぞ、也、り、〇、助、け、の、何、今、静、深、の、ま、こ、も、こ、ぞ、
 ともいふ、宝、物、集、と、る、ん、や、り
 こぞぐら、ん、と、こ、ぞ、ぐ、ら、又、こ、ぞ、ぐ、り、足、お、も、と、り、小、探、乃
 ぬ、ぬ、一、俗、ノ、操、字、と、ら、り、字、あ、一、梢、也、と、る、ん、や、り、止、観、
 撫、と、ら、り、新、撰、字、鏡、ノ、八、擊、撫、と、ら、り、
 こぞげら、俗、也、小、尖、の、ぬ、ぬ、一、刮、字、と、ら、り、刮、馬、汗、か
 少、ま、り、一、説、古、事、記、ノ、岐、佐、且、と、え、え、る、訛、言、也
 こぞめづき、紅、條、月、の、影、八、月、と、い、ふ、
 〇こぞも、神、代、紀、小、木、種、と、ら、り、〇、口、倍、ノ、ハ、子、種、の、衣、也



くづらち 木之也立る木をいひつる中臣後にも磐根樹

まつくらんるり○小刀ともいひ平家物語小行家片は野太

乃地名こ 刀と持片は今作りの小太刀と持とるるり○木立林ハ加賀

こたよ 海氏より西細流孟津より鳥の乳也といひ柳手紙

いもこけこふさるる木風といひて木のたふ也といひ流り地

文をいひかつりともいふと木につけるすめをけりといふ今い

ふものうく納ガい似るもハ是れあつべきや

こたよ 五嶋とあり海東記に薩摩州に属と日本往中

国者待風之地といふりさるる小倉り○内なる清稻御倉り

て稻と納る倉也俗に清稻殿といひハ訛也

こたよ 倭名抄に微道といひ唐韻小小道也と注さす揚り

こたん 答に島といひ後段に唐山といひ尋後といひ古者後

更珍以尽主情といひハ是後段といひ

あたつ 火燧心得と火撮をいひ唐人ハこたあといひ

西六地ト磚ト株ト椅トをいひるり日知録小北人以土為牀

而空其下以發火謂之土坑舊唐書高麗傳冬月皆作長坑下然

煨火以取煖此即今之土炕なりと云由似るる也といひの禁

中ハ火爐を用くまはしるるり炭火櫃ト生てそを覆ひて

かけて用わさるるり

こたくみ 木匠の事也松匠トむかへといひ○朝野群載小

木ト寮トこたト乃トつかさトなり

こたよ 木ト岳也松トの年トくトて校の意トなり

こたよ 古茨橋ハ下野トなり

こたよ 日本紀小太子とあり百濟代也

こたよ 浮氏トの由トにト也ト秋トといひ古帖トにトなり

こたよ 日トはトもトありト或トはトなりト心トとトはトなりトといひ又

こつろ 万葉集にスルルル木屑の積る也○こつびて
 つつむ 木端の家こけつと木屑
 こつげ 木屑の積る也○こつげのめり 二議一統スルルル
 こつげのめり 倭名抄に鰓と云る角中骨也と注す
 こつぐ 俗人こつぐと云る杵築の安伊勢杵築祭
 りり 或杵築平殿地と云る也
 こつろ 杵子の字龍圖公案スルルル
 こつが 子宮乃俗名也○こつがの水と云る
 木のすこふたすも也と云る
 こつふ 酒盃のたふは虫語也或ハ骨杯と云る又云つふ
 ともいふ金回羅と云る或ハ球と云る 遵生八牋の高脚勸杯
 こつ也○かたはる朱の九きと云る

こづみ 木屑と云る万葉集にハチツツ拾き愚
 弟よ百千多こつと云る
 こつけい 下学集に滑稽利只也と云る今俗訛てこ
 つけいと云る
 こいり 類聚雜要に木造と云る木道の工れ造る義也○
 所の名及姓よりハ伊勢一志郡也
 こつとき 乞食ハ法華經に出僧も乞食頭陀行と云る増
 加れ侍も乞食と云るけと乞食の永と云るのけつれ又ト
 きと云る
 こつが 骨插と云る人の骨と云る骨子と云る
 りりのことぬ
 こつちや 東鑑に骨張と云る骨子法華のこつちや○
 公羽の俗飽満と云るちやたれと云る
 △こつち 木寺ハ邦良親王の法末の号也正長元年祿光院

こと也とつり 欽林良材集ふけりていひ出さるるものも此也や
ふんえいりとも殊のあや

ことふちとつりつわさ 日本紀小判事とあり 奉新官官
のあ也

ことつらつ乃みや 琴造のえとあり 讃州三木郡の邑名也
盛衰記とあり

△ことあぎ 小水葱也 奉新とあり
これまゆ 馴熟のさこあけりとも同 ○仲正守といふことあぐ
あともよあり

こかざの 秋日本紀小練金と割せり 延喜式と砂金と對し
つり 熟金のあ也

こかいとよ 室町家の討奉行に於ては將軍のさしひりて
つらつらげ法内書といふ也 肉とれ法とありあ也

○こふり 倭名抄と胡荽とあり 音れ特あり 今とあり

ごらごらと 蜜糖とあり

こふおふ 日本紀小玉后とあり 太子とこれせりともあり 和
記に並に百端の語也ともあり

こりや 拾遺集とあり 音弱也 倭名抄とあり 音は特
せり也 ○山とんやと稱するは天南星也とあり 本草にも鬼药
弱とありとあり

ごよまとい 新撰字鏡とあり 菜黄とあり

ごんぐら 文獻通考とあり 五保人と見えあり 日本紀小凡皆
五の家相保とあり

△ごり 榎とあり 木綿のあ也 御所榎と上品とあり 大和
乃法所の邑とあり 出す

○このま 乃原集とあり 木間又木際とあり

このめ 樹のあ字彙とあり 束音次木也とありとあり
このも 祝詞と盤根木根とありとあり

このも 木葉也或ハ抄と云り○雀小似て淡黒なるを

このこ 近衛の音精也彩吉惟行幸一みつかのこのをよ

この女 御綱の成成一○真名伊勢御綱小近衛司と親衛司と云り

このこ 俗小孫と云り子之字爾雅一云と云り

このみち 木道と云り材木と云り見分るるを云也

このあろ 日本紀小利と云り子代の安利息と云也

このあろ 伊豆守源仲綱と名つるを云り一麻毛と蔭小云

このりり 海鼠の色ぬるや袍と云り

このあろ 海鼠の毛がらと云りこの海鼠を云り一うさ法と云

このいゆ 神名式山城葛野郡木嶋坐天照御魂神社古来四

学者最所崇信也と遊仙窟の跋ふるを云り太秦村と云

このりり 神代紀云木株と云り延喜式小樹と云り

このりり 同棧杙也大殿祭ハ木根のまゝと云り往昔の諺小岩根木と云

このりり 言問一昔と云り一はむなり三韓の事と天地割判之草木言

このりり 語之時と書るの如し○同紀小樹下と云り一河及口修

このりり 神代紀云以還と云り一は以来と云り

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 木葉石の稱西屋も同一豊後肥前と云ハ柴石と

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

このりり 同寝ぬるはねぬると云也

中のいて破る也或魚乃形なり其岐国の木也石より
魚乃形の紋あり

このみぢり 木實をれ後後いしや呉行集
ありしひち山乃奥れをききさけぶあ乃みやうて
このみぢり 核のさかきけり宗紙乃説也木實

天狗やもつり拾玉集
宋栗れ色づく秋の山ぬは木実とけぬ木葉精か

この事又類聚小秋猿守栗林と云えり
この乃とが 多識編小葉子金也

このあやや 木下園也勢つるきやり○このやけ
せこのもせとつり

このそれみや 木實也油ぬの奥あり油ぬの製も木
れ葉の上よりとつり人のけり

このも乃きり 菅家万葉より木好あり

このしがつり つらつら肉ちいさきと木實復とつり

このたまかぜ 木實風也享保年万湖お千あの時湖辺九十九
浦より人まどゆ鹿飛石と切てあとおの木の後より人まど

日小地震雷電あかき逆またあり万船はし流き瀨死の
この三十余輩也して今より湖水風をげしと里人木の後
風より

このりくまはり 儀式帖小本本祭とつり又榎木本祭とも
つるあり

このらちれり 諺語の譬小つり籠中鳥也濮陽傳う詩
よ為聖苑中若空懐樹上嬉と云えり

このこれうさ 催馬楽也此殿ハ秘曲乃名也
このみちのにくさ 徒然草より木道の工也匠人とつり

△この織物なるく阿蘭陀よりあり
このみち 十月と小春といふの歳時記より云えり○腹乃絞

痛とるるとりひの音やもよつり小張のやぬー○強とるる
△不和柔貞といふ

こむむ 拒字扞字かるとり強きをぬー

こむむ 袋中子、後綱朝臣の故平次奉て下膳のきつて
ひよものをかるとりつとつるも樸小似るるや

○こむむ 山城守治郡也或許波多神社三座とるる二座ハ木
幡村あり一座ハ五箇庄大和田村あり柳明神と稱する

山科強田山とあり○今小鬼の服小つる同家ぬー
こむひ 媚の義也といふ也又小馳の義や俗也

こむひ 俗小物とすこむひとつる剛破の音あつるや○崩
と俗こむれあつるもさぬー

こむむ 日本紀ニ裔字孫字跌躄字や訓せりとも同
こむむ 牙籤のたつり小狭の義也鞞ハ倭の造り多也

けふこむーともつる

こむん 中部と呼び火番也とつる○小判金ハ大判に比
るつ也或ハ大板小板とる○つる舟も火番の特用とる

ぬー○蝦夷とるもとるぬーとこむんとつる
こむん 倭名抄小碁局とあり

こむー 御畫とかくとむと故実とる一字二字例也こハ
肉丸が月日の間小関字とる衣袋とる日づけとるハさす也

こむん 狸小似てあひう好んで人家に住り子身の肉至て
強きをりく名くさむをぬーし

こむや 小早の義万葉集、足早乃小舟とるも也揚子方
言、小舸謂之舩とあり

こむく 奥列とる出唐書日、作小獻琥珀大如斗とる、
よも出高麗倭國者色深紅有蜂蟻松枝者尤好とる、倭名

抄、俗音久は久とスル者あり
 こもがけ 強張の義こそろとひても同
 こもがけ 海人藻芥よハハ月朔日の小を粥内裏仙洞を令
 用給良薬也彼粥調法序と云焼して粥入合とスル者あり
 こむみあそび 塹囊抄よちりへごり四五人合合と云と云
 いひやうつう 疎縁と云むみて知音と選ふをぬ
 ○こびや 使役の走卒といへ火と云う○革小の犴皮と云
 小人の居よりぬぬし○小人の歌羅巴の北海也高不二尺鬚
 眉絶無男女無辨跨鹿而行鶴鳥常欲食之とスル者あり
 こびき 木椀の義也鋸匠をいふ
 こびふ ○荅葱といふ也○鄙俗に中飯とまてずして合と云ふ
 書と稱せり
 こびか 鯉名と云う伊豆の地名也
 こひざめ 恋の醒と云うや六百五十五合とスル者あり

こひぐさ 恋種の義ありかけと云う○一種の名より入も
 のも大なりして白む也涉世録より相思の也といふ
 こひみづ 恋の義あり也といふ
 こひぬき 泥沼の義也云うけてと云う
 こひぐら 刀より琇と云う小樋口の義や鯉口也といふ
 こひやう 弓のより紀事といふと云ふ小共の義つれと精兵と
 いふて対て大共といふぬし
 こひあかむ 万葉集古今集より名名伊勢物語小恋死考と
 ちり至切の情也
 こひごうも 意衣の義旅衣といふ如○一種の義と云
 △ハ加賀白山と云う
 こひのせさ 意乃園也ん乃清と云ふ
 こひぢかつ 万葉集より白意よカと加うと云う
 こひのはま 古帖

つとくと袖乃そひちてまれ日のおもひま乃つまりきりり
妻ノ端と兼々

△こぶら 名醫類案小蛇風こぶら
拳とらり小節のやめへ新撰字鏡小捧ともこ

的矢小こぶらとつらう太平記おるるなり○木こぶら辛夷也
こぶら 吳服と古事記小れらるるなりこぶら應神天皇の時

吳服と使して衣服裁縫の工女と求めさせり今も
人絹絶と通して吳服と稱し吳服や綵段鋪也○白石日本邦之

俗所稱吳服者蓋與深衣之制大同少異耳
こぶら 小匏の系枇杷の和名也こぶら

こぶら 倭名抄甲倉とらり抄及新撰樂記ノ義倉ノが
こぶら 静海小美濃讚岐と法皇小献して御分國と稱せ

こぶら 静海小美濃讚岐と法皇小献して御分國と稱せ

こぶら 倭名抄ノ相據とらり西土ノ奉法なり

劫と歷るの系也梵去ノ一世とりて一劫といふ
劫とらる也其名のもらり知らる河也俗名よおを

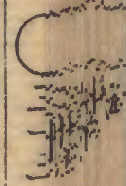
用さる例多しわらひおたおたふたさる(お)一
大神文系ノ鋪とらり甲の釘あり

△こぶら 金汁行といふ覆もの系也○禁裡院中の御築地の
塵穢と掃ふ者ハ丹波国山岡より来りてこぶらといふ○

小治のちりそ亦悲田院の部類ハ刑罰の時ノ紙簾ノ罪状姓名を
筆する者也

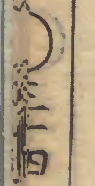
こぶら 小祠といふ盛囊抄ハ小壳倉といふ
こぶら 虎窟おれ小腹をやくとらるる腹中雷鳴のこぶら

也俗名よこぶらとらるるもこぶらとらるる雷のこぶら
こぶらとけ 兒戲ノ中の中れ小佛といふるなりそハ白粉と焼乃



釜小小佛と稱する物なりて其沸騰する体と摸せし也といふ
 こわりのりち 寒中一饒と云ふもしる也本草小氷糕と云ふ
 是と六月朔日大隅大炊師の禁中一執る今民る用ひる
 代氷の衣にあつたれ氷に代て用ふ
 こわりのり 水精石といふ法おし出実し氷の如し西土千年
 老氷所化といふ也或ハ紫色の石なり按するは即水精なりて
 今水精と稱するものハ石英なりし水晶ハ日本と云ふも
 法おしるんるなり水晶石英のれ五色なり留青日れも日本
 有青氷粧紅氷粧といふなり○和州伊勢ちふなり氷石ハ色黄
 白存さ一二分むなり板の如く氷の如く玉髓也
 こわりのびこ 氷川の事諏訪の湖よりなり○隆信の言
 一井と掘假屋と建つる氷と一石穿ちそれなり網を入るこ
 代穿ち竹竿なり網と送るなりて後石をかく穿ちて魚と捕
 へつる

こわりのり 氷の橋也諏訪の湖よりなり○隆信の言
 月さゆるまは氷橋の如なり氷のくはこわりのりやぬや
 如履落氷の心よ就てつる
 こわりのり 氷の園也おれなりぬや
 こわりのり 雪のさやまかみとくはるハ仔細物也
 よいごんか川のちまては田はありやまされぬなり
 蝦蟇の漏れつる也
 こわりのり 氷の楔也狹氷のちまらかりてげら
 わりのり 氷のくまびとみゆ後捨き集
 こわりのり 氷のくまびとちてけりむなりぬや今ハとら
 こわりのり 北山鈔小郡領と云ふなり大おややゆりけり
 一〇郡ハ仁徳天皇の法代始と云ふ類聚国史より
 こまけ 源氏よりてこのまけと云ふ孟津に充くの細分
 也とつる○新撰字鏡小こまけと云ふなり



トヤラウトシラウ。○兒女子の小賢。ききとこまあやくとたう
とイヤもきよう知らる。修や

こまのこま
俗、瑣碎、忌避とこまといふ。護摩の牛玉乃
といふ也

こまづかひ
小間使也。禁中の微者也。使番、隸屬と考也
小松摺也。延喜式、いふ也

こまのこま
護摩の灰也。こま、灰、サ、楨の徒、呼とををこ
めて人、代、た、て、て、銭、貨、と、む、さ、り、し、ら、う、い、ひ、や、る、也、一、也、
然、る、と、い、ふ、く、と、い、ふ

こまらひりり
延喜式、小町席と云ふ。小區席、か、く、一、○禁
中、小町、ら、う、と、い、ふ、女、官、の、名、小町、ら、う、と、い、ふ、小町、ら、う、也、小、小、式、部

小丸近小大進の例也。こまの町、三、多、小、野、の、小町、か、く、也、玉造の、小
町、四、位、少、將、を、ひ、一、衛、か、く、八、別、人、也、徒、然、也、一、小、野、小町、を、事、極、り、て
さ、こ、う、ゆ、ら、と、や、ら、う、一、と、い、ふ、玉造、と、い、ふ、文、う、ら、ん、と、い、ふ、は、文、法

行、う、ち、り、と、い、ふ、説、あ、き、と、い、ふ、野、大、師、の、法、信、の、員、録、一、入、る、程、か、わ、り、
こ、ん、え、ら、う

△こみ
俗、塵芥、と、い、ふ、水、の、滲、る、る、う、ら、う、と、い、ふ、向、ぬ、し

こみづ
倭名抄、白飲、と、い、ふ、濃漿、の、名、也、と、い、ふ、これ、は、今、の、
あ、り、の、や

こみら
新撰字、後、小樽、又、桶、と、い、ふ、小甕、の、名、也、し
徑、と、い、ふ、り、小、の、名、也

○こん
紺、の、音、也、論、語、の、注、小、深、青、揚、赤、色、と、い、ふ、る、と、い、ふ、
語、於、小、深、底、鴉、青、色、と、い、ふ、也、が、う、と、羽、り、か、と、い、ふ、う、ら、う、○酒、小
初、こ、ん、こ、ん、か、く、い、ハ、献、字、也、西、土、一、献、酬、か、と、い、ふ、○杯、酒、と
酌、て、客、小、進、む、と、献、て、客、飲、畢、て、又、酒、と、盛、り、て、返、す、ま、と、
酬、と、い、ふ

こんよ
来世、又、来、ね、乃、也
こむろ
姓、小室、と、い、ふ、盛、衰、記、義、仲、の、將、小室、忠、兼、ら、う

信列の小屋ぬ

こひぎ

小麦也○收穫の時陰なまれと化して小蠶とある述

異記小麦為飛蛾とあり○麩小麦粉也○こむぎれはこむぎハ

倭名抄一麩とあり今やこれハこむぎとあり○麩れ音と

ありて麩筋也

ごんく

倭名抄小金鼓とあるあり鉦鼓も同し又ひり

○ガ○も列せり○撰集小金鼓と金口とありされ金口者

如來口業所記とあるあり

ごびら

曆家より五墓日也五行の墓乃也

こんめん

婚姻也尔雅一婿之父為婚姻婦之父為婚婦之父母

婿之父母相謂為婚姻とある○同ち一婦之黨為婚兄弟婿之

黨為姻兄弟とあり

こんせん

餛飩とあり四聲字苑一餛飩餅割内麩煮之と

あり○餅とあり也官亦古本祭祀に用事あり餛飩の多小象りと

れやや救荒野譜も今俗祀先者多用之とあるあり○臣下
のこんとんとりハ臣下に給人也

こんとん

魂膽の字と填り俗字也

こんとす

混搔子とありり番詰也或ハ口規とあり天文

家算術者るい器と用り今絲欄といひ鉄等も器と用

りて蛮国の名もつるるハ二物とありり物とあり

こんどん

居家必用ふ年上金神剋授官木且とあるあり

陰陽家よりとありり白虎神のり也

こんがう

懇弓の音也

ごんめう

言妙の音也

ごんびん

言便の音也

こんたて

献とありり酒ハ一献二献といひり下酒の物とあり

とありり酒也韋居聽輿一食牌といひり也といひり朱子の語也

こんとー

日本紀ふ末年とありり

こびりさる

濃紫の衣也日如紀小黒紫とつん三位以上

の袍れ色也これひりさるともあり○後世小宮の衣も採用也

こんくさい

釣狐の狂言ふつう和歌連珠小吼噓の文字を填

りう狐の鳴きとめて好まう也和泉大倉郡小吼噓寺に即物林寺

也今昔物語に狐をかりてこくくこくくとええううんふんく

とつう

ぐんごま

二水記小御所とええうう足利將軍公京

ましやせりびりて林裡の休息ありて袋束おともおされり

ううい名りう長槍局のびりひるりて

こんぢや

朱慶餘詩天然根性異とる也○米色ふりふら

紺青也後朱雀帝の時摂津うう始ておて枝葉略記にうう

紺青りう衣の色に金青りう○本草替疑小金青者空青之

最上也類聚雜要小金精ともも

こんたひま

小荷駄るの衣也

こんじやく

蒟蒻の轉音なりし

こんげん

混本袂の名古ハスえも奈良朝お始まる

袂の体古事記の片字ありとありて五七と云句ありと清輔

長のちる安部清行朝臣の混本字

然魚乃夕やけまこちりやまこせれ名をとれの名をかし

こもちりやまここの袂とありお袂も調ひ字のまも面白く

こんちりや

切支丹の類族也

こんじんざい

金輪際とあり大地の底とあり梵おふる也

こんがくせん

金剛屑の象金剛鑽とあり天平五年に大坂沙

治玉石と葛下郡逢坂山のよ方あり知らざる也

こびりがたり

倭名抄に轉筋とあり腓の及る也漢書の跋

盤も同

ぐんごま

エ答里亞ともあり莫斯科米亞と並ひる

蜚也こつう

△こめさき 源氏和泉式部日記に「こめさき」の語あり

こめさき 本の名伊勢文川のよふありて細長く小也櫛大

毒と毒虫と避るゝし入近き世に外宮の貞命長官八十八の付

し榊中よりゆりし鳩の杖は本ありとてり

四月は赤紅の少とて用たり洗泡のかりこやも用たり折る本也

の字と結成りては「さき」と呼ぶ又九日の名に用るあり

こめららハ 職人「さき」をさるゝり小女童は「さき」し今もめのり

こめかき 倭名抄小蟀谷とてり應嚼而動と注せり米嚼

の義也 後日本後紀十六國言有物如灰從天而雨畿

こめのこが 内豊稔五穀價賤老農名此物米華とてり明和寅年卯年

はるなりし

○こまの 源氏とてり物乃義也五葉とてり木の枝松か

こまのこが 西宮記に木物枝物とてり

○全浙兵制 門子と譯せり小者の義今もり

○おのるは菰野のり氏 小物のり東鑑とてり

○吉野のり子守社のり式にり吉野水分神社也とてり

○子れ 守とてり 財と借りの河也子本とてり韓文柳氏墓誌にえん

とてり子息也今昔物作小利子とてり作徳米と子粒とてり

もと也○柳文ふ權其子母贏且不盡とてり子ハ利息母ハ本稻

也贏も利也 交とてりたひい入ちがふ也

こまのりぬ 萬葉集に隱沼とてり又こまのり小沼とてり

こまのりづ 日本紀に隱集ふとてり隱水の義也

ことがい

茶碗の名ハ熊川とあり朝鮮の熊川郡也

朝鮮語ハ終とくむく川とカクツリ日本紀よるもあれ也

列セリあれも川の韓語也○平ともがいり鬼ともがいり

ことごと

薦僧の義ハ薦席ハ堅ヤトより名とれとぞ

とツリ芝風穴道者朗菴の餘流と汲りの也或ハ虚无僧の義

也ともツリ朗菴宇治郡吸江菴一卒と風穴家ハ宇治郡岡本

村のありたり初め妙安寺に住り妙安チハ妙法院の境内ハ

あり昔の暮露の流カレト○妙心寺開山遠忌の時薦僧堂ハ

入て心經と吹法事とセリ半あり

こりりづま

万葉集よるも隱嬌とあり起立ハ母ありぬ

物ハ又ありぬもハ玉の敷ハゆけゆれぬあたくもありとぞ

あつぬこりりづまハカクツリ

こともたご

薦席也平群トツげトありハ重繰の義也

こともり

隱石の義也ハ底ハありとツリ

こりりもぢ

嫁娶乃衣服器物ハ大小乃もぢニツとリて從

のりもぢとぞお條とハ陰陽と合セとぞ也やツリ或ハ

天浮橋乃物ありともツリ

こりり

石中ハ小石と懐抱もとツリ○富士山乃

麓ハ子持ハ村あり村ハ大石ありて石ハ穴あり其穴と細竹

とツリて搔探とハ必もまゑありとハ木患ハれ如

幾とハいも同トツとツリハ嗣と求る婦人等と潔

め石と水と浸とハ其氷と服とハ必も孕とツリ佐石

△供ハ馬湖南岸東西有石東石腹中出ハ小石西石腹中懐

小石故藪人ハ子于此有驗因号ト子石ト云とツリ

こともご

薦簾の義ハ木集

わあつあつとツリヤの形のとりのもれをやらとツリ

こもづらとえ

薦と編むやとツリたぐらとツリやとツリ

薦と編むやとツリたぐらとツリやとツリ

代喻へのり

△こや 後夜とちり寅の刻也初夜ハ戌の刻也中夜ハ子刻也
西天ハ晝夜とちり分つ不謂初中後也して佛徒より知るる也
也まてあやのりよる也

こやつ 古事記よ是奴とちり轉してこつとちり

△こゆみ 強とゆみと字彙又東鑑より名源氏樹を名か
とれもえ西雀小弓ともゆみの木本集小

○殿上小弓合といふ中右記より名堀河帝れ時也

こゆき 徒然草よゆきこゆき丹波のこゆきといふ米

つさあひひとれ似ては粉名といふたれ粉名といふこ
とわやまりて丹波のとハハ也垣や本れまこやこといふし
とあらぬちりゆきをち羽院とさかくかりまてちのちふ
やくゆられ々々ゆき 後夜の助日記よゆきといふ名

こゆきのやみ 諺のつら後撰集小

○こよみ 菓菓といふ伊勢とてこよみといひ虫と疝を用
うちおとてえびつとこよみ又野葡萄といふ漢名也又黒蒲萄
ともいふ

こよひ 日本紀よも今宵とちりこ此也

こよろ 御用の字五雜俎よる也

こよりの名 倭名抄ハ寒とちり又ふこよひともえ也煮こよ
らひの名也

こよろぎのつとね 倭名抄のつとねとてほげ小わろとてか
あひとつとねとちりきこのつとねありくとるえとちり小餘綾ハ磯
といふつとねとちりいひかけとる也餘綾ハ相摸の郡名也倭名抄
よもつとねとちり綾ハつとねの音あるつとねとちりハアと
及ろ也と朝鮮小とちりつとねといふ磯も倭名抄よ伊蘇

靈也火雷神ハ上桂御靈也宮田麻呂ハ綴喜御靈也名勝志一上御靈ハ上出雲寺御靈堂也下御靈ハ下出雲寺御靈堂也このつら日本紀畧村上帝の條ハ御靈堂上出雲寺と云ふ也又法神記ハ平治元年上皇命令祭橘逸勢世以為淫祀と云ふ也ハ姊小路猪熊の祠也定基々の説ハ文徳実録ハ孤忠可哀と云ふハ流刑ハ宛ありしやこらんろう 火鈴振と云ふハ火の用心ぬ役也

△こるもハ 倭名抄ハ本朝式と云ふ擬海藻と云ふハ文字ハハハ心太の一名也

○ごまろやん 御料人の称東山丸公方義政の御料人局のり本々女御料の要也と云ふこれハ男子ハも稱ハ太平記ハ萬壽御料と云ふやうされハ古ハ何のやと稱も如く其儲けのさなるや又俵藤太ハ食散したる御料袴の上ハ落さるや將門拂ひ被ひるやんえと云ハ御墓石の標の如く食散と云ふは稱謂ハや宮治捨せふもごまろと云ふハひるをさしてやうと云ふやう○京畿ハ

で娘のゆげごまろやんと云ハ薩摩と云ふごまろと云ハ

△ごろく 万葉集

鳥と云ハ大和と云ハまきまきぬと云ハ大和と云ハまきまきぬと云ハ抄ハごろくハ東河也ハ東河也と云ハ河の助け也と云ハこれハ子等來の要オオモヤの君ハ子等來と云ハ大虚言鳥と云ハありと云ハ

ごろく 太平記ハ大物の五六と云ハお付と云ハささこをささ

て今ごろくと云ハ掛と云ハささこや五五八九寸をともんえと云ハ今五寸角六寸角をいふもの也○鐘の制ハ五六と云ハ五寸六分ハ倍と云ハ定法あるやりて也と云ハ一説ハ武志のころハと云ハ五五三十寸目やると云ハそれと云ハた名也と云ハごろくと云ハ畿内と云ハ石の小やと云ハあふと云ハ石と云ハごろくと云ハ胡盧巴と云ハ三四月と云ハむ咲実のころと云ハけ乃やハ近來清種と云ハ

とひ侍つる万葉集は神とてしてぬまはるふゆは
のすらまてあつて同家かきし又衣とてかきしは恋のふかくさむ
乃りて古帖とらり

梵經云裡宝珠とらり

△こらものこられたま

牛王とらり牛とてとらり牛頭牛黄牛蒨牛膝
も同く古よりひききと音りて呼まらり牛王は如來の 孫を

○牛王寶印のつら牛王
涅槃經智度論おらり

守護神咒經とらり其修法は五大牛王儀軌と詳し上より佛の徳
稱と別也又巫祝附寄して生土の文字とらり本居の社の字やを

とらり拙とらり○熊野の牛王寶印は鳥點と用はる鳥を

熊野の神使とらりその裡に記請文の事は源平盛衰記
とらり

○金剛宝戒章は熊野三山のつと述べて此三神殃
妄語之罪糾破禁之穢とらり

起る事おらり後氏
よりと始りん元暦二年武藏坊弁慶は借米の祀文も掛

熊野白山約束之状如侍とらり後世何豆おねお不權
現とて鎌倉時代とらり平泰時の奉行頭人等と

とらり政事お私せりの連判の記沈文とてらり
始りん○事林廣記は西天南左華羅國事西天佛教尊牛屋壁

皆塗牛糞以此為潔各家置壇以牛糞塗壇然後置花水藝香供
佛とらり耶舍法師傳は西國土俗以牛能耕地生出萬物故以牛

糞為淨梵王帝釈及牛並立神廟以祠之佛隨俗情故同為淨と
らり

明史は瑣里國人崇釈教重牛日取牛糞燒灰塗其体
又調以水徧塗地上とらり席上腐談も北方有牛王廟とらり

感神院と牛頭天王と稱し攝社は牛王地社おらり
皆淨屠氏より起つとらり標嚴經は牛糞取雪山

大力白井若非雪山其牛臭穢不堪塗地とらり

俗説の多也

俗説の多也

俗説の多也

